

# 信頼結べる時期に「初診」を

私の勤務する認知症専門病院には、1年間におよそ500、600人の初診患者さんが来られます。

このうち、およそ20%は非常に軽度な時期に、別の20%ぐらいはかなり進行して在宅介護が困難になったような時期に、初診されます。残る60%はその中間です。

軽度な時期に初診した患者さんでも、病気は徐々に進行していきます。早期診断ができたからといって、進行の速度をどれほど遅くできるかは疑問です。

## 医のおはなし 認知症の早期診断

アルツハイマー病の治療薬であるアリセプトは、進行を10、12カ月遅らせると言われますが、その効果は人によって様々です。そもそも、アルツハイマー病の進行のスピード自体に、かなりの個人差があります。

それでも、早期診断、早期対応は、認知症の予後を決める上で、非常に重要です。

病気が軽い時期、患者さんは、体験したことのない自分の能力の喪失に戸惑い、不安にさいなまれていきます。こういう時期に検査を受け、診断を告げら

れることは、患者さんにとって非常につらいことです。しかし、そうしなければ、その先何年も、たった1人で、不安で不気味な経験をし続けることになるのです。

家族や友人の根拠のない励ましやいたわりは、患者さんの不安を和らげることはなく、かえって疑心暗鬼を生む原因にもなりかねません。その不安が、幻覚や妄想を呼び、不穏や興奮を引き起こすことになるのです。

早い時期に受診して下されば、患者さんは自分の病気について理解することができます。加えて、こういう時期なら、治療者と患者さんが、お互いについて理解し合うための時間を持

つことができず、出来るだけ認知機能が保たれている時期に基本的な信頼関係を結んでおけば、病気が進行して患者さんの洞察能力が損なわれた後でも、生活を脅かすような症状を軽減することが可能になります。

もう一つ付け加えると、早期に診断されれば、成年後見制度などの活用で、自分の将来をある程度自分で決めることが出来ます。認知機能の低下が進み、激しい精神症状や問題行動が現れた後で、家族に無理やり病院に連れてこられた患者さんと、短い外来診療の間に信頼関係を結ぶことは不可能です。

(翠会和光病院  
斎藤正彦院長)